

歴史探訪

クラブ

其の
92



History Inquiry Club

文化振興課 ☎23局3635

FAX 22局3811



▲城坂の人造石遺構(福江町)

近代を支えたまぼろしの工法 「人造石」の遺構

まずは左の写真をご覧ください。
福江町の通称「城坂」にある、土地

の段差を支える擁壁です。何の変哲もない石垣のように見えますが、よく見てみると、石と石のすき間がかなり離れていて、普通の石垣とは違うことがわかります。またコンクリートの壁に石が貼られているようにも見えますね。

実はこの工法は「人造石」工法と呼ばれるもので、鉄筋コンクリート工法が普及する前の明治10年から昭和初期ごろまで大規模な工事にも使われていた工法です。この工法を開発したのは、現在の碧南市で天保11年(1840)に左官屋の三男として生まれた服部長七です。長七は、これまで土間、水槽、塀などの小規模なものに使われていた「たたき」を、より良いものに改良しました。

た。そしてこの工法は、皇居の学問所の土間工事などを施工したことで、「長七たたき」として信頼を得ていきます。「人造石」の名は、明治14年(1881)の第二回内国勧業博覧会の会場で、農商務省から雇われた外人技術者が長七のたたき



▲通常の石垣(浦町)

工事を見て、「この人造石は何で作っているか」と聞いたことがきっかけのようです。しかし、今日使われている、石に似せた建築材料の人造石とは違います。

この「人造石」工法は、明治10年代から30年代にかけて、当時は高価だった鉄筋コンクリート工法が普及するまでの間、ついには全国各地の海岸の護岸などの重要な土木工事に応用されるまでになりました。特に強固なものにしたい時には、福江町の擁壁のように「たたき」と石を組み合わせました。面白いことに、この人造石の工事は、石垣の職人でもなく、土木工事会社でもなく、左官屋が施工します。というのも、人造石工法に応用した「たたき」自体が左官屋の技術だからです。まさにこの工法は、

西洋の技術を手本に進んでいた明治時代の土木工事に、従来からの日本の技術を活用した当時の人たちの創意と工夫の結晶であるといえます。

素材だけを聞いてみると「強度に不安があるのでは？」と思う方がいるかもしれませんが、人造石構造物は100年経過している今でも、しっかり現役でその機能を果たしています。人造石工法の良いところは安価なこと、そして何よりも丈夫なところなのです。

福江町の人造石遺構は、形の整った花崗岩を使い、見た目も美しく、田原市で確認された中では一番優れた遺構と言えます。(増山)

※「たたき」は石灰とサバ土(マサ土)を水で練り、板・木づちで叩きしめてつくる技法です。古い民家の土間、水槽、井戸枠などで残っています。

今月の「表紙」

▼今月の表紙を撮影した田原城跡は、私のお気に入りスポットの一つでもあります。春は桜、夏は紫陽花、秋は紅葉…。歴史や芸術だけでなく、季節も楽しめます。皆さんも、石畳をゆつたりと歩きながら、城下町500年の歴史を感じ、紅葉を楽しんでみてはいかがでしょうか。(O)

【表紙の写真】田原城跡(田原市博物館)